近世節用集と茶の湯の知識

徳丸貴尋

はじめに

節用集とは室町中期に成立した漢字・熟語辞書である。中世の節用集は、知識階級の和漢韻事のための用語集という性格のものであったが、近世になると従来の辞書機能に加えて生活における実用的な内容や通俗的知識を付した節用集も刊行されたことが特徴である。柏原司郎氏によると、近世節用集の付録記事は、元禄・享保期頃から辞書の巻頭・巻末や本文上欄の頭書に、年号、国名、人名、地名、制度、日本図、三都図、年代記、年中行事、料理法、和算法、暦占、華道、茶道など生活文化の実用知識を盛り込んだ絵入り日用教養記事の集成へと発展していったという。[1] つまり、節用集に掲載された付録の内容は、実生活において便利に使える情報を多く掲載しており、茶の湯の記事も含めて、当時の人々が共有されうる知識・情報であったといえよう。さらに、付録の特徴として、既に刊行されている『武鑑』や『公家鑑』などの内容を網羅しつつ、国郡名、年号、将軍名といった用語一覧を次々と組み込んで一冊にしていることが挙げられる。そのため『武鑑』など単体で刊行されている書物を購入できる裕福な階層ではなくても、節用集を一冊購入すれば間に合うように工夫されている。

節用集の読者について、享保期頃の民衆が記録した家蔵の蔵書目録によると(1)「甲斐国山梨郡下井尻村の牢人百姓依田長安」[2]と(2)「河内

国志紀郡柏原村の在郷商人三田家[3]」が、仏教書や儒学書、歴史書、文芸書、実用書などとともに、両家とも節用集、重宝記、貝原益軒著『三礼口訣』などを共通して所蔵していることが明らかとなった。元禄・享保期頃には数百冊の蔵書を持つ畿内の村役人や在村医をはじめとした知識人層の存在は珍しくはなかったという先行研究[4]もあるように、節用集の利用層は、支配層と被支配層をつなぐ、村の管理者、具体的には名主や庄屋といった一家の家長の立場にある人であり、「家」の運営に必要な知識を得ることを目的に、節用集を利用している。

近世節用集の付録に関する先行研究は、辞書史学を要する国語学に留まらず、隣接諸学からも提言されている。佐藤貴裕氏によると、「文明史の池上英子・横山俊夫、教育史の石山秀和、地理史の開国百年記念文化事業会、近世史の小林茂文・横田冬彦らは、付録の内容を吟味し、その機能と可能性についてそれぞれの立場から言及している」とし、幾つかの研究成果を挙げている。例えば、池上英子氏は、近世節用集を含む通俗教養書の付録が、日本の地理・歴史・礼節を一覧させているため、日本を作り上げるマニュアルであると意義付けており、横田冬彦氏も近世人の歴史認識・国家意識の形成にあずかるものと的確に分析している[5]。久岡明穂氏は、付録全体の情報について「節用集の頭書・付録は、まったく知られていない新たな知識を発信するものではなく、それまでにある程度は流布した知識を整理したものである」、「それまでに知られていた情報を受け取り、再発信することでポピュラーな教養として浸透させるような役割を果たしている」と指摘している[6]。さらに、藤實久美子氏は、武家に関する総合的な情報を掲載した武鑑と節用集の関係性を明らかにされた[7]。鍛治宏介氏は、節用集と近江八景詩歌の関係について述べた論考[8]があるなど、節用集の付録記事に関する研究は蓄積されているものの、諸芸、特に茶の湯の内容については、これまで一度も分析されたことがなかった。

そのため本稿では出版文化が隆盛した近世の出版物、なかでも知識を伝える書物として普及していた節用集に記される茶の湯の記事について、次の視点から考察する。一点目は節用集に載る茶の湯記事の典拠となる書物を具体的に明らかにすることである。二点目は節用集ならではの工夫、例えば挿絵の特徴を分析することである。その分析を通して、近世節用集の付録に載る茶の湯の記事は、単なる知識を羅列したものではなく、信頼性のある茶湯書を典拠とし、茶会作法を学ぶ読者層を明確に意識して出版されたことを論じる。これらの考察を通してこれまで見過ごされてきた近世節用集に掲載された茶の湯の内容を明らかにすることが本稿の課題である。

一、近世節用集の茶の湯記事――『茶湯初心抄』について

本章では節用集に組み込まれた茶の湯の記事を分析し、当時の社

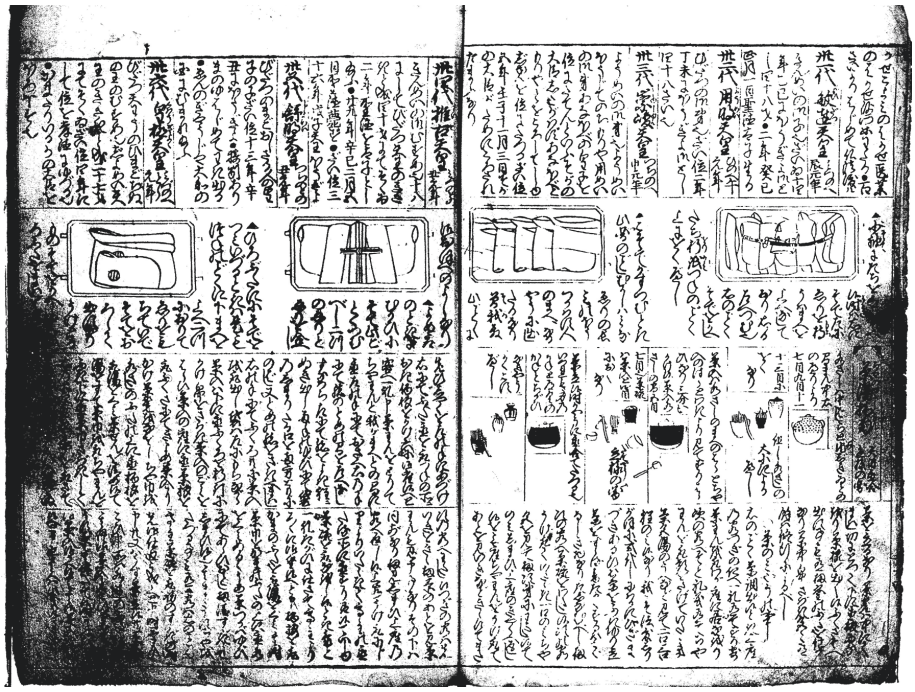

図1　大海節用和国宝蔵（表1⑤）には『茶湯初心抄』の一部分が、見開き3・4段目の部分に掲載されている。

会で共有されていた茶の湯の常識とはどのような内容かを明らかにしていく。

国立国会図書館所蔵の節用集をはじめ『節用集大系』百巻[9]を参考に、茶の湯の記事のある節用集を調査した結果、表1のとおり、三十点確認することができた。

表1によると、宝永年間に刊行された節用集が茶の湯の記事を掲載した早い例ということになる。例えば、図1は、宝永七年（一七一〇）頃に刊行した『大海節用和国宝蔵』（表1では⑤）である。同書は見開きで四段組の構成であり、茶の湯の記事は、上から三・四段目が該当する。その内容は、「茶湯指南」と「茶のミやうの事」という小題を付した点前解説と、図三点は茶を点てる亭主の目線から見た道具の置き合わせを表している。

この記事を分析した結果、この記述内容は、寛文十二年（一六七二）、初学者向けに刊行された『茶湯初心抄』の一部であることが明らかとなった。さらに、表1の三十点の節用集のうち⑤『大海節用和国宝蔵』を含めると二十一点が『茶湯初心抄』の一部分を転載しており、ほかには貝原益軒著『三礼口訣（茶礼口訣）』を二点（⑧、⑩）、中世の喫茶に関する往来物『喫茶往来』を一点（㉚）転載していることも判明した。

以下の史料1が『茶湯初心抄』で、史料2が『大海節用和国宝蔵』である。ここで『茶湯初心抄』と『大海節用和国宝蔵』の本文の類

史料1『茶湯初心抄』

大目置合の事并立様の図

一 Ⓐ水指は中柱と地敷居との間真中右のへりより七目九目十一目十三目に置、但水指の大小による也

一 Ⓑ茶入は水指のまへの腹と茶入のはらと脇ゟみ候てすり払ひ也、三ふ一もかけ候、茶入水指の間五目七目也

一 Ⓒ茶椀は茶入と四めに置也、何れも大小の違ひ有

御 Ⓓ茶のミ様の事

一 客方は右のⒺごとく出候時上座の客次の仁に一礼有てすり寄、茶椀を取我座に居置り、次の客へそと礼義仕、扨茶椀を取、頭をさけ候ていたゞき、茶色湯のうへなど見て二口にても三口にてもの申也、（以下略）

史料2『大海節用和国宝蔵』

茶湯指南　天目置合　立様の図

Ⓐ水さしは中ばしらと地しきゐとの間まん中右のへりより七目九目十一、十三目にをくなり、但し水さしの大小によるべし

Ⓑ茶入ハ水さしのまへのはらとちや入の　はらとわきより見てすりはらひなり、三分一もかけ候、茶入水さしの間五目七目也、Ⓒ茶碗ハ茶入と四目におくなり

Ⓓ茶のミやうの事

Ⓔ右のごとく出候とき上座乃客つぎの仁へ一礼有てすり寄、茶わんを取、わが座に居なをり、次の客へそと礼義有て、ちゃわんを取、頭をさげていたゞき、茶色湯のうへなど見て、二口三口程のミ候なり（以下略）

似点と相違点を確認しておきたい。

それぞれ共通する箇所に波線部Ⓐから Ⓔを引き、異同を調べたところ、典拠である『茶湯初心抄』本文の漢字が、節用集『大海節用和国宝蔵』では平仮名に改められた箇所が見られるものの全体の文意に差違は殆どない。

寛文十二年（一六七二）刊の『茶湯初心抄』は、従来の茶の湯の歴史では取り上げられたこともなく未翻刻の書物である。しかし同書の内容は、初学者を対象に初めて刊行された茶の湯の書物という点で注目に値するであろう。というのも、寛永期から茶湯書が刊行されるが、寛文期に至るまで武家レベルだけではなく、民衆レベルまでを対象にした茶湯書の出版はなかったからである。[10]『茶湯初心抄』の跋文は、「凡古織伝草人木等之書雖有数多初心愚童ノ心ニ仰難叶　今此書ヲ令梓行畢」とあり、同書は『草人木』（寛永三年［一六二六］刊）や『古織伝』（正保四年［一六四七］刊）のように、専門的な内容をもつ茶湯書とは異なり、初学者のために上梓されたことが記されている。この点が既刊の茶湯書とは性格を異にしており、茶

湯書という書物全体からみて注目すべき書物である。また『茶湯初心抄』の刊記から、版元は「松井三良兵衛」と分かるが、著者は不明である。ところが、延宝三年（一六七五）刊の書籍目録『増続古今本朝彫刻書籍題林大全』[11]の「茶湯書」の項目に「茶湯初心抄　曲肱堂作」とあり、著者が曲肱堂であることが判明した。

『茶湯初心抄』の目次は次のとおりである。

一　廻状書様乃事付礼状の事
一　路地入乃事並亭主方の事
一　座敷入乃事付亭主方あひしらひの事
一　会席膳部のこと並中立乃しだい
一　御茶立やう乃事付乃ミやうの事
一　大目置合乃事並立やう乃絵図色々
一　道具所望の事付あひしらひの事
一　茶杓こひ所の事付茶入乃袋水指
一　床に花入置やうの事付かけ物かけやうの事
一　花客へ所望のこと付炭所望並客あひしらひ乃こと
一　棚に環羽掃置合乃図並平生心もちの事
一　四畳半置合立やう乃図並一てう半乃事
一　風炉まへ乃事付炭置やう付客あひしらひのこと
一　風炉置合立やうの図並五徳付はい乃こと
一　花入見やうのこと並床かざりやういろく

史料2『大海節用和国宝蔵』（表1⑤）に掲載された『茶湯初心抄』の一部分とは、傍線部の二点「御茶立やう乃事付乃ミやうの事」と「大目置合乃事並立やう乃絵図色々」である。その内容は、お茶の点て方をはじめ、茶会に招かれた時のお茶の飲み方など、基本的な作法に触れる部分を転載しているのである。

この二つの表題以外の他の表題は、床の間の掛物の掛け方、湯を沸かすための炭の置き方や灰のことなど茶事における具体的な作法の解説を示している。つまり、節用集の書肆は、茶会の主・客作法の要点を簡潔に示した傍線部の表題二つの記事を節用集に掲載したことが読みとれる。ここで示した事実は『茶湯初心抄』を転載した節用集二十一点に共通しており、『女節用集罌粟嚢家宝大成』（表1⑲）だけは『茶湯初心抄』全文を転載しているものの、ほかの二十点の節用集は、傍線部二つの文章を転載しているのである。[12]

ではなぜ『茶湯初心抄』が節用集に転載されたのであろうか。その理由の一つとして、近世の出版における版権の問題からも検討するべきであろう。元禄十一年（一六九八）に幕府から発布された重版・類版の禁令により、書物の複製行為が禁じられたため、版権のある書物は、節用集に採用されないと考えるのが一般的である。[13]それを踏まえると寛文十二年（一六七二）刊『茶湯初心抄』は、版権問

題が厳密化される十七世紀末以前に刊行されたため、同書を節用集に取り込みやすかったと考えるのが妥当ではないだろうか。この点については別稿を期したい。何れにせよ、『茶湯初心抄』が内容の面で初学者向けに最適な書物であったことには変わりはない。

以上の事実から注目することは、次の三点である。一点目は、『茶湯初心抄』や『三礼口訣（茶礼口訣）』（表1⑧⑩）が、単体の書物＝茶湯書として出版されたことに留まらずに、民衆が所持していた節用集に引用・掲載されたことである。

二点目は『茶湯初心抄』のように、茶会作法を簡潔で合理的に示した内容は、近世に生きた民衆の要望を反映していることである。それを節用集に掲載したことにより、茶の湯の知識は、農村部や地方の読者へと広範囲に共有され、更なる広がりを示したと考えられる。

三点目について、その広がりから窺えることは、近世の民衆がどのような茶の湯の知識を持ち、共有されていたのかを想定できるということである。つまり、茶湯書という専門的な内容の書物が、民衆向けに編まれた節用集に流用されたことによって、近世に生きた普通の人々が持ちえた茶の湯の一般的な知識が節用集を通じて確認できると考えられる。

二、節用集に載る茶の湯の挿絵

本章では節用集の挿絵に注目しながら、節用集ならではの工夫・特徴について明らかにしていく。

まずはじめに図2『茶湯初心抄』の挿絵と図3の宝永三年（一七〇六）刊『大魁節用悉皆不求人』表1①）の挿絵を確認しておきたい。図2の挿絵は、茶室に道具を置き合わせた図である。その挿絵は、茶を点てる亭主の目線から見た道具の配置図であるが、初学者にとってこの挿絵は理解不能であろう。一方で、図3は人が茶を点てている場面や道具を扱う手元など手足の動きを具体的に示した作法の様子が図像化されている。文章は『茶湯初心抄』と同じでも、挿絵はより具体的に分かりやすく描かれているのである。

このことから節用集『大魁節用悉皆不求人』（表1①）の挿絵の内容は、初学者向けの挿絵として、『茶湯初心抄』の挿絵にさらなる改良を重ねられていることが特徴である。

点前図と本文の解説がセットになって掲載されていることは、節用集のみならず、専門的な内容をもつ刊本茶湯書全体から見ても特徴的である。というのも茶室の中に道具を置き合わせた図は、図2で示した寛文十二年刊（一六七二）の『茶湯初心抄』をはじめ、茶の湯の書物として最初に刊行された『草人木』（寛永三年［一六二六］

刊）や、それ以降の茶湯書、例えば遠藤元閑の書物にも掲載されている。ところが、『草人木』も図2『茶湯初心抄』も茶室の平面図に道具を置き合わせた図のみであり、道具をもつ手元の図など点前を具体的に示した挿絵はない。[14] 専門的な内容をもつ刊本茶湯書の中で、図3『大魁節用悉皆不求人』（宝永三年［一七〇六］刊）のように、点前の様子や主客が道具を持つ手元や道具を扱う図が掲載されるようになるのは、宝永元年（一七〇四）刊『茶湯独り漕』[15]に掲載された挿絵が早い例である。同書には、茶の湯の独習書として、点前作法の本文と、道具を持つ手元の図をはじめ、棚への道具飾りの図や掛物の図、花、炭、茶道具各種の図が豊富に掲載されている。ところが、『茶湯独り漕』の挿絵は、図3の『大魁節用悉皆不求人』（表1①）の点前図と全く一致しない。そのため『茶湯独り漕』の挿絵を、そのまま図3の『大魁節用悉皆不求人』に転載したとは考えられない。

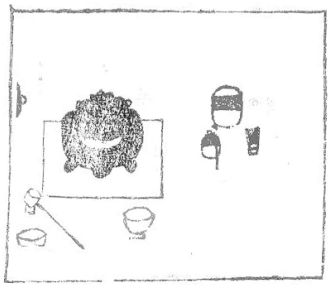

図2 『茶湯初心抄』に載る挿絵

そもそも図3『大魁節用悉皆不求人』が刊行された宝永三年（一七〇六）以前の茶湯書に、四十三点もの点前の挿絵を掲載した茶湯書は他に見当たらず、これらの点前図は、『大魁節用悉皆不求人』のオリジナルであると判断できる。つまり、版元にとって節用集を販売する対象が、茶の湯の初心者や庶民層であるため、版元はデザインやレイアウトなど工夫を重ねて編み出したことが節用集の挿絵を考える上で特筆すべきことである。

さらに、表1で掲げた節用集を通覧すると、殆どの節用集に何らかの茶の湯に関する挿絵が掲載されている。そのうち『茶湯初心抄』より転載した二十一点の節用集の図の内容は、『茶湯初心抄』に掲載されていた挿絵（図2のような道具を置き合わせただけの平面図）などであった。それ以外の節用集には一～三点の挿絵を掲載しており、その特徴は次のとおりである。

一、茶会の様子（亭主が炉（又は台子）で点茶し、客（僧、武士、町人）が飲茶する挿絵）
二、茶室への席入り前の場面（屋外の腰掛待合で客が待つ場面）
三、茶道具の図（風炉、釜、炭道具、茶入、茶碗、棗、柄杓、天目、水指等）

なかでも『大国花節用集珍開蔵』（表1⑪）は、茶器四点と茶碗四

点のほかに、茶会で千利休、今井宗久、古田織部、小堀遠州が茶席で一堂に会する場面など、茶の湯の歴史における頂点的茶人を登場させる図を掲載している。また、嘉永二年（一八四九）刊『大日本永代節用無尽蔵』（表1㉙）には、茶の湯（抹茶）だけではなく、煎茶

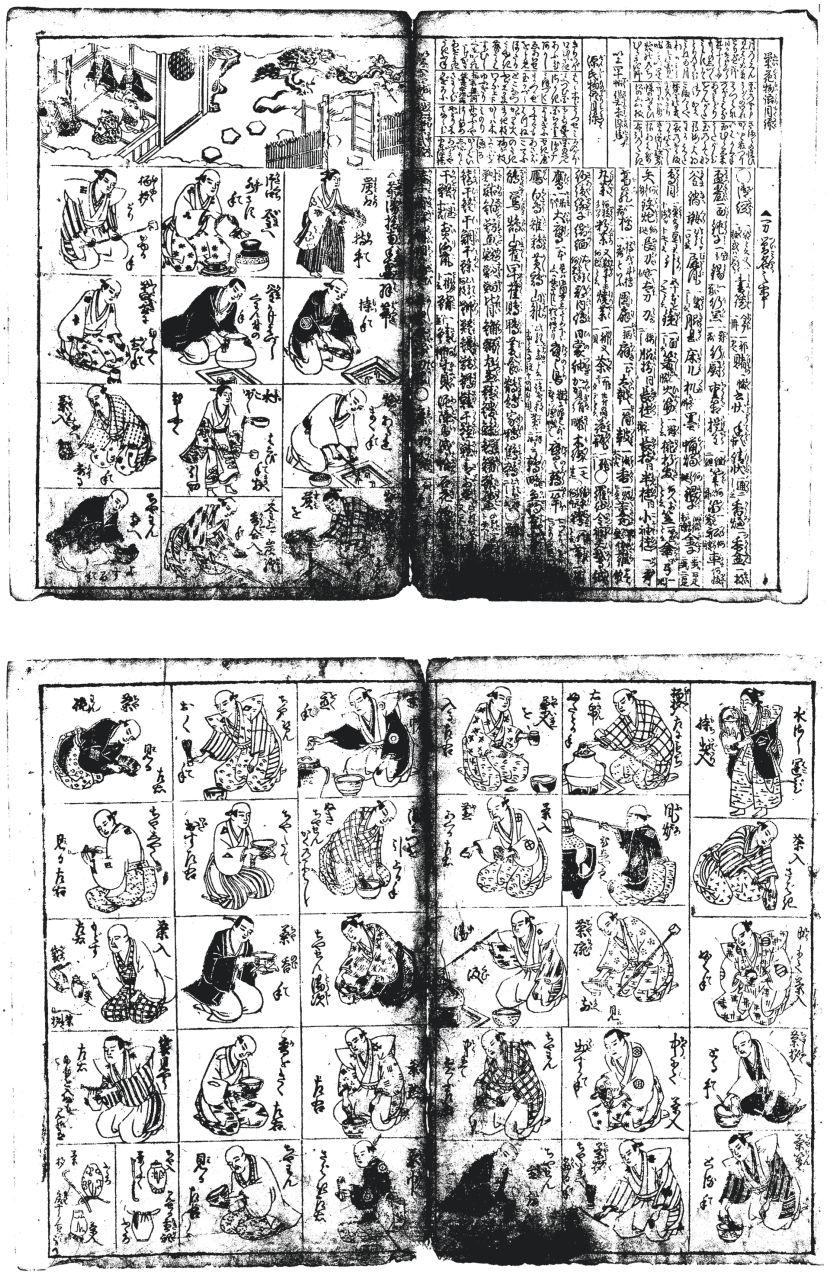

図3 『大魁節用悉皆不求人』（表1①）の挿絵部分（上下共）

道具の図も記載されるようになった。文字だけではなく、挿絵を付すことで読者の理解を助けるなど、実用を促す版元の編集作業が窺える。

ところで、表1の節用集で一番詳細に丁寧に作られたという印象を受けたのが、図4『大益字林節用不求人大成』（表1⑩）である。その理由の一つとして、初学者を想定して著した茶会作法書『三礼口訣』[16]（貝原益軒著）全文を転載していること。二点目は、本文を補うように点前作法の場面を表した挿絵二十四点を付すことで読者の理解を助けているためである。ちなみに『三礼口訣』の原文は、本文のみで挿絵はない。図4『大益字林節用不求人大成』（表1⑩）に描かれた二十四点の挿絵は、図3『大魁節用悉皆不求人』（表1①）と全く同じ挿絵ではないものの、人物の構図などは非常に似通っていることも指摘しておきたい。

図4　『大益字林節用不求人大成』（表1⑩）。上段に挿絵、下段に『三礼口訣』（茶礼口訣）の「夜の茶会」部分を掲載。

ここで『三礼口訣』と『大益字林節用不求人大成』の本文の一部分を抜き出して異同を確認しておきたい。史料3が『三礼口訣』で、史料4が『大益字林節用不求人大成』である。原典である『三礼口訣』本文の漢字が、『大益字林節用不求人大成』では平仮名に改められた箇所が見られるものの全体的に殆ど異同はなかった。

『大益字林節用不求人大成』の書肆が、『三礼口訣』を採用した理由に、第一章で確認したとおり、享保期の民衆の蔵書として『三礼口訣』を所蔵していたことからも窺える。つまり、『三礼口訣』が、益軒本の一つとして当時流布していた書物であったことや民衆にとって支持されている書物だからこそ選書されたと考えられる。

『三礼口訣』（元禄十二年［一六九九］刊）を著した貝原益軒（寛永七年［一六三〇］―正徳四年［一七一四］）は、福岡藩の藩儒であり、出版という近世における新たなメディアに着目した最初の儒者とみなされている。[17]識字人口の増加と商業出版の盛り上がりを見せた社会の中で、益軒は漢文言語の学問を大衆向けの平易な和文体に変換し、一般向け教養書として民生日用の知識を刊行したことにより、多くの読者を獲得した。[18]その『三礼口訣』の「茶礼口訣」部分を書肆は選書し、『大益字林節用不求人大成』（享保二年［一七一七］刊）に掲載したのである。ポイントとなる作法については、図像化した挿絵

史料3『三礼口訣』

一　夜の茶会、客となる礼法の次第。外路次に手燭あらば、上客より取て次第に腰掛の廻り厠の内見るべし。亭主迎ひに出て後、上客手燭を持、内路次に入、手燭を次の客に渡し、上客は内腰懸の行燈の置所、又は内の拵やうなどよく見て、行燈を取、腰かけのまはり、円座の置やう厠の内なと、念を入見るべし。

史料4『大益字林節用不求人大成』

一　夜の茶会、客となる礼法の次第。そと路次に燭あらバ、上客より取て次第にこしかけの回り厠の内見るべし。亭主迎ひに出て後、上客手燭を持、内路次に入、手燭を次の客に渡し、上客ハ内腰懸の行燈のをき所、又ハ内の拵やうなどよく見て、行燈を取、こしかけの回り、円座の置やう厠の内など、念入見るべし。

を新たに付すことで読者の理解を助けていることが読み取れる。例えば、図4上段の挿絵にあるように、右から「茶せんおきとる手」、「茶きん置手」、「ゆにつけ引上る手　ぬきちゃせんかくのことく」というように、点茶前に茶筅（茶を点てる竹製の道具）を清め終わった時の茶筅の置き方や右手で茶碗を拭いた後の茶巾の置き方（左手は膝の上に置くことを暗示している）など、道具を清めるために手先までクローズアップした場面をかなり詳細に描いている。このほかにも、道具の扱い方や茶を点てるために美しく見せる手足の型など二十四点の挿絵を補い、レイアウトにも工夫を凝らしていることが特徴的である。つまり文章だけでは正しい作法が初学者に伝わりにくいため、茶会で必要な場面を表した挿絵を本文の上段に付すことにより、初学者でも分かりやすい紙面を構成しているのである。現在でいう写真を多く掲載したビジュアル版点前教則本を想起させる。

このことから『大益字林節用不求人大成』（表1⑩）が、茶の湯を掲載した節用集の中で、最も茶の湯の概説を記した到達点と考えられる。

以上をまとめると、『茶湯初心抄』や『三礼口訣』という茶の湯の内容に特化した書物（茶湯書）には、挿絵がないことから、節用集を刊行する書肆が適宜アレンジをして挿絵を挿入したことになる。茶の湯を予め体験した読者、あるいはすでに茶会作法を稽古している読者にとっては、挿絵のない茶湯書を読んでも抵抗はないだろうが、初学者にとって点前中の手足の動きや道具の持ち方などは、実際に経験したことがないため文章だけでは理解しにくい。節用集が民衆に広く受け入れられたのは、挿絵やレイアウトを補い、読者に配慮した書肆の工夫があったことも看過できないのである。

おわりに

本稿では、近世の節用集に掲載された茶の湯の内容を分析し、次の二点を明らかにした。

第一に、書肆は民衆のニーズに応えるために、適格な茶の湯の内容を節用集に掲載したことである。そこに大きく関わった茶湯書が、既刊の『茶湯初心抄』（寛文十二年［一六七二］刊）と『三礼口訣』（元禄十二年［一六九九］刊）である。その内容は、茶会に招かれた際の作法や茶会ではどういうことをするのか、茶の湯とはどういうものかといった、茶会作法の知識が合理的に記されている書物であった。

第二に、その情報に新たに挿絵を加え、読者（民衆）に対して茶の湯の理解を導く工夫を加えたことなどが挙げられる。しかも専門的内容をもつ既刊の茶湯書には挿絵は掲載されておらず、具体的に図像化した点前の挿絵を付したことは、節用集ならではの工夫であることを明らかにした。

織豊期から近世初期（寛永期頃）における茶会作法や知識の取得は、師匠からの口伝＝稽古を通じて身体の所作（型）などを体得していたが、元禄・享保期頃になると、民衆レベルでも稽古と並行して、書物からも茶会作法を学べる新しい環境が整ってきたといえる。つまり『茶湯初心抄』などの本文に、新たに挿絵を付して節用集に掲載されたことは、茶の湯の知識が身分や地域の相違を越えた社会共通の認識の一つとして形成され始め、大衆的な読者へと広く共有されていったと考えられる。

注

（1）柏原司郎『近世の国語辞書 節用集の付録』おうふう、二〇一二年。
＊付録記事の具体例として『大益字林節用不求人大成』（享保二年刊［一七一七］、江戸須原屋茂兵衛・大坂伊丹屋茂兵衛板）表1⑩の目次は次のとおりである。
「書札文章書初・書留高下付・賛詞字類」「急救諸方」「判形相生相剋吉凶」「銭相場割」「本朝分野図」「日蝕・月蝕」「十二辰初正図」「日の出入を知事」「潮汐盈虚之図」「伊勢之両宮」「諸礼図式」「天照皇太神宮御遷宮略記」「和礼当用躾方指南」「掛物掛はづしの図」「万請取渡式法手引」「万対名の事」「諸祝儀之巻」「東百官」「源氏物語目録」「和歌六体」「立花手引指南」「茶湯手引指南」、また暦関連記事や「四季之異名」「十二月之異名」「百官」「武具短歌」「鷹文字」「人体図」「鍼灸要愈穴」「中興武将伝略」「万躾方の図」「書礼礼式条々」「太刀折紙書法」「目録の書法」「遺物進上目六書法」など。
＊このほか節用集の史料的性格について、佐藤貴裕『節用集と近世出版』（和泉書院、二〇一七年）や佐藤貴裕「辞書から近世をみるために――節用集を中心に」（『シリーズ本の文化史2 書籍の宇宙 広がりと体系』鈴木俊幸編、平凡社、二〇一五年）なども参考にした。本稿では付録記事のある節用集に特化したが、付録を載せず漢字を簡便に引くことに特化した『早引節用集』（一七五二年刊）なども近世を通じて刊行されている。

（2）国文学研究資料館史料館編『史料叢書一 近世の村・家・人』名著出版、一九九八年、一五八―一六〇頁。
依田家は、戦国期から近世初期に武田家、徳川家に仕えた武士としての戦歴を持つ。長安の父の代から帰農し、手作り地主となるも享保十年（一七二五）に牢人身分を認められた。長安（一六七四―一七五八）は、二十四歳で家督を継ぎ、享保十四年（一七二九）五月、五十六歳で家督を譲って隠居。その家産目録の一部として作成されたのが、「享保十五年庚戌之正月書物目録依田氏」である。同目録によると『太平記』『平家物語』『徒然草』『農業全書』『養生訓』などとともに『節用集』、『調宝記』、『女重宝記』、『三礼口訣』を所蔵されていることがわかる。

（3）長友千代治「河内国三田家蔵書籍関係資料」『近世の読書』青裳堂書店、一九八七年。
三田家（肥料商で柏原船仲間）の初代浄久と浄賢の死後、この二代にわたって収集された蔵書を売却する際、享保二十一年（一七三六）に作成されたのが「旧蔵書目録」である。同目録には二四〇部一〇五四冊を載せる。それを体系的に整理した横田冬彦氏によると、左記の通り四つの分類となる。
1、思想関係（日蓮宗等仏教書、儒学・教訓書）。2、教養（漢詩文、和歌・俳諧・国文・謡）。3、読本（軍記物、草子物、随筆類）。4、実用（医薬、実用書、博物書、手習・教育書）。三田家の場合、全蔵書数の三分の一が仏教書であるが、儒学書や歴史書、文芸書、実用書までほぼ全てのジャンルが揃っている。依田家と同じく三田家の蔵書にも『古今和歌集』、『平家物語』、『太平記』などの素本・注釈書とともに、『万華節用集』、『立新節用集』、『万年節用集』、『男重宝記』、『女重宝記』、『重宝記大全』、『万宝重宝記』、『色々重宝記』、『三礼口訣』を所蔵されていることが明らかとなった。

（4）横田冬彦「大坂周辺村落社会における蔵書形成」『日本近世書物文化史の研究』岩波書店、二〇一八年。

（5）佐藤貴裕「節用集の辞書史的研究の現況と課題」『日本語の研究』第十一巻二号、二〇一五年、一二三頁。

（6）久岡明穂「近世節用集おける教養の浸透 頭書と付録を中心に」『浸透する教養 江戸の出版文化という回路』鈴木健一編、勉誠出版、二〇一三年、三二〇―三二一頁。

（7）藤實久美子『武鑑出版と近世社会』東洋書林、一九九九年。

（8）鍛治宏介「近江八景詩歌の伝播と受容」『史林』九六（二）、二〇一三年。

（9）『節用集大系』全百巻、大空社、一九九三―九五年。

（10）茶湯書の出版は、寛永三年（一六二六）刊の『草人木』が嚆矢となり、以後三都の書肆を中心に、元禄・享保期頃から茶湯書の出版は増加する。例えば、元禄十二年（一六九九）に刊行された書籍目録『新版蔵書書籍目録』に載る「茶湯書」の項目には、『茶経』、『古織伝』、『草人木』、『茶湯方名物記』、『続茶湯方名物記』、『茶湯初心抄』、『茶器弁玉集』、『三斎茶湯書』、『利休七荘書』、『茶湯流伝抄』、『古今茶道全書』、『喫茶織有伝』、『茶道便蒙書』、『茶道要録』の十五点の茶湯書が確認できる。→慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』二、井上書房、一九六三年、四六頁。
＊この時期の刊本茶湯書の特徴について、村井康彦氏は「特定の流派を対象とせず、茶史・茶人系譜から部屋飾り・点前作法に至る、茶の湯に関わるすべてを記した百科全書的の性格をもつ茶書と、皆伝者よりは初心者、亭主よりは客人を対象として書かれた啓蒙書的な内容をもつ茶書がある」と述べている（『千利休追跡』角川書店、一九九〇年、一八八頁）。

（11）慶応義塾大学附属研究所斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』一、井上書房、一九六三年、二〇一頁。

（12）『茶湯初心抄』（龍谷大学図書館所蔵）は未翻刻史料である。節用集に転載された「一 御茶立やう乃事付乃ミやうの事」の翻字は次のとおりである。

御茶立申事

一、先柄杓を左の手にあづけ、右にて蓋置を取、つねの所に置、柄杓をかけ、らくに御座候へと客へ一礼申、茶碗を置候、茶入を取て茶椀と我まへとの間に置、左の手にておさへ、右の手にて緒をとき緒のとめの方を左へなし、則左にて緒をよき比にぬき出し、両手の指にて袋のしまりたるくちを両方ともにのはし、又とめの緒をさきへまハし、右の手にて袋共に茶入をとり出し、袋ハ左にもちながら茶入ハ下に置、袋を折釘にかけ、ふくさをさばき茶入のこみを払ひ、茶入の座にをき、茶杓をとり、ふくさにて清め、茶入に懸、茶せんを直し、茶椀をなをし、茶巾は水指のふたのうへに置、柄杓をとり湯を汲、茶せんを清め候て湯をすて、茶巾を取、茶椀をふき下に置、茶巾さはきして右の所に置、茶杓をとり、扨茶入をとり茶をすくひ入、湯を汲茶を立る也、茶箋は中にてまハし切に取て下に置候て、居直り茶碗を出し候、ふくさへ出すことも有、扨釜のふたを仕候也、ふくさ茶巾さばきいろ〳〵有、余は執行によるへし

(13) 佐藤貴裕『近世節用集史の研究』武蔵野書院、二〇一九年、六四頁。佐藤貴裕「節用集の辞書史的研究の現況と課題」『日本語の研究』十一（二）、二〇一五年、一二三頁。

(14) 注（10）で示した十五点の茶湯書をはじめ、元禄期までに刊行された茶湯書を調査したところ、道具を扱う手元など点前のポイントとなる部分を図解した挿絵は見当たらなかった。この事実によって、点前作法の具体的な挿絵が付されていることは、節用集の特徴の一つとして留意するべきであろう。

(15) 『茶湯独り漕』は、茶道具の扱い方、花の入れ方、台子飾り、庭園、茶道具の呼称などが独りで学べるように図示して解説した茶の湯の独習書。井上新七（茶全軒）著。宝永一年（一七〇四）刊。版元京 和泉屋茂兵衛板、江戸 和泉屋次郎右衛門。内題『当世茶之湯独漕』。改題本『師匠不入茶湯早指南』。国立国会図書館蔵。

＊節用集以外にも『茶湯初心抄』を転載した書物に重宝記がある。長友千代治編『重宝記資料集成』全四十五巻（臨川書店、二〇〇九年）に載る二九七種の重宝記のうち、茶の湯に関する記事を掲載した重宝記は、十四点確認できる。このうち、(1)『不断重宝記大全』（元禄四年［一六九一］刊）をはじめ、(2)『男重宝記』（元禄五年［一六九二］刊）や(3)『新版増補男重宝記』（元禄十五年［一七〇二］刊）、(4)『増補昼夜調法記』（正徳四年［一七一四］刊）、(5)『改正増補昼夜調法記』（安永七年［一七七八］刊）の本文は、節用集でも引用された『茶湯初心抄』を転載していた。その挿絵について、(1)～(3)は『茶湯初心抄』本文と同じく茶室の中で道具を置き合わせた図であった。ところが、(4)と(5)は、『茶湯独り漕』と全く同じ挿絵ではないが、道具を扱う手元という点では近似している。この点については、先に刊行された『茶湯独り漕』の挿絵を、(4)と(5)の作者が参考にしたと想定できるが確証はない。さらに、(4)と(5)に載る挿絵を節用集（例えば図3・4）と比較したところ、挿絵の構図は全く類似していないため、挿絵に関する異同はなかったといえる。重宝記に載る茶の湯については後稿で取り上げたい。

(16) 益軒会編纂『益軒全集』巻之一、国書刊行会、一九七三年。

(17) 辻本雅史『思想と教育のメディア史 近世日本の知の伝達』ぺりかん社、二〇一一年。

(18) 益軒が生きた近世前期（元禄期前後）は、民衆が新たな学習への意欲の高まりをみせた時代であった。『三礼口訣』の読者について、元禄・享保期の庄屋層と町人層各家の蔵書目録を調査したところ左記の四家が『三礼口訣』を所蔵していることが明らかとなった。

(1)「河内国柏原村の在郷商人三田家」

(2)「河内国日下村の庄屋森長右衛門」

(3)「摂津国伊丹南野村の在村医笹山家」

⑷「甲斐国下井尻村の牢人百姓依田長安」

例えば⑵河内国日下村の庄屋を務めていた森長右衛門が、享保四―十二年（一七一九―二七）頃に作成したのが「自家書籍目録」である。この蔵書目録（一二一部三九四冊）から儒学書や漢詩文関係に交じって『三礼口訣』を所蔵されていたことがわかる（森長右衛門貞靖著、日下古文書研究会編『日下村森家庄屋日記』日下古文書研究会、二〇〇五年）。⑶笹山家は、横田冬彦「江戸時代の在村医」『地域研究いたみ』二十七号、伊丹市立博物館、一九九八年、六四―六五頁。→⑴三田家は注（3）。⑷依田家は注（2）。

表1　節用集の付録にみられる茶の湯関係の記事一覧（本稿で取り上げた節用集については丸数字で表記した）

	書名	刊行年		著者	版元	本文の内容	挿絵の内容
①	大魁節用悉皆不求人	宝永3年	1706			茶湯初心抄の一部。挿絵43点。	茶湯指南手前図と題して、点前中の手元や道具の持ち方など43点。
2	大嘉節用無量宝蔵	宝永5年	1708		江戸　中村進七・志村市良右衛門、京　中川茂兵衛［他］	挿絵2点。	亭主と客2人の茶会の図と水指、茶碗、茶筅、茶入袋、茶台の図
3	（世話用文章3巻）	宝永6年	1709	艸田子		挿絵3点。	亭主と客2人の茶会の図と高麗茶碗の図、待合の2人に対して亭主が喚鐘を鳴らす図。
4	女節用集罌粟嚢	宝永6年	1709		大坂　秋田屋市兵衛	茶湯初心抄の1部。挿絵2点。	亭主が炉で点茶し、武士ら客4人が喫する場面。待合の2人に対して亭主が喚鐘を鳴らす図
⑤	大海節用和国宝蔵	宝永7年頃刊	1710		青物町　萬屋清兵衛、□□町　伊丹（破損）	茶湯初心抄の一部。挿絵1点。	武士が茶を飲む場面「茶台の茶を台共に取りて台を下に置き、天目斗持ちて飲むべし、お客有ば天目斗を取りて飲むべし、通いの人も此心得有べし」
6	万金節用永代通鑑	宝永7年	1710			茶湯初心抄の一部。	
7	立新節用和国宝蔵	宝永7年	1710			茶湯初心抄の一部。	
⑧	大広益節用不求人大成	正徳2年	1712			茶礼口訣。挿絵24点。	茶湯指南手前図と題して、点前中の手元や道具の持ち方など24点。
9	字福節用大黒袋	正徳4年	1714			茶湯初心抄の一部。	
⑩	大益字林節用不求人大成	享保2年	1717		江戸　須原屋茂兵衛、大坂　伊丹屋茂兵衛	茶礼口訣。挿絵24点。	茶湯指南手前図と題して、点前中の手元や道具の持ち方など24点。
⑪	大国花節用集珍開蔵	享保2年	1717		京　北尾八兵衛	茶湯初心抄の一部。挿絵2点。	茶器4点、茶碗4点と茶席で千利休、今井宗久、古田織部、小堀遠州が同席している場面。
12	万世節用集広益大成二行両点	享保8年	1723		浪花　左衛門	茶湯初心抄の一部。	
13	俗字指南車	享保16年	1731	中村平五		本文「茶の飲やうに至りては機転第一の物なればさしてむつかしからず（略）」のみ。	
14	悉皆世話字彙墨宝	享保18年	1733	中村平五	京　植村藤松	挿絵1点。	挿絵解説文「茶道　千宗易　茶乃湯を数寄乃道といふ（略）」。
15	万歳節用字海大成	享保19年	1734	京　長村半兵衛［他］		本文「茶湯　茶道之儀者非慰風流古来（略）」のみ。	
16	新増節用無量蔵	享保20年	1735	三宅袋河編		茶湯初心抄の一部。挿絵2点。	露地囲い待合の様子と茶器4点、茶碗4点
17	大広益節用集	享保年間	1735頃			挿絵1点。	挿絵解説文「茶の湯乃事ハ文明年中に足利義政公より（略）」

	書名	刊行年		著者	版元	本文の内容	挿絵の内容
18	森羅万象要字海	元文５年	1740	時枝左門	大坂 伊丹屋茂兵衛	茶湯初心抄の一部。挿絵９点。	茶湯指南手前図と題して、点前中の手元や道具の持ち方など９点。
⑲	女節用集罌粟嚢家宝大成	寛保３年	1743		江戸 須原屋茂兵衛、大坂 秋田屋市兵衛	茶湯初心抄全文。挿絵２点。	亭主が炉で点茶し、武士ら客４人が喫する場面。待合の２人に対して亭主が喚鐘を鳴らす図
20	永代節用大全無尽蔵	寛延３年	1750	桑揚編	江戸、京都の５書肆	茶湯初心抄の一部。挿絵２点。	万諸礼之法式と題した、掛物を見る図１点と常の茶の飲み方の図と題し「茶台に乗せ出る時は茶台共に取り、台を下に置き、天目ばかり持ち飲むべし（略）」と解説した図１点。
21	改正増字 万世節用集広益大成二行両点	宝暦６年	1756	絢藻斎編	大坂 鳥飼市兵衛、同 松村九兵衛、同 大野木市兵衛、同 渋川清右衛門、同 鴨井茂兵衛	茶湯初心抄の一部。	
22	女節用集文字嚢	宝暦12年	1762	山本序周編、月岡丹下（雪鼎）画	大坂 河内屋八兵衛、河内屋喜兵衛	茶湯初心抄の一部。挿絵２点。	亭主が炉で点茶し、武士ら客４人が喫する場面。待合の２人に対して亭主が喚鐘を鳴らす図。
23	百万節用宝来蔵	明和６年	1769		江戸、京都、大坂の５書肆	茶湯初心抄の一部。挿絵１点。	亭主と客３人の茶会の図。
24	万代節用字林蔵	天明２年	1782	蘆田鈍永書	京 津国屋嘉兵衛、菊屋長兵衛、菊屋忠兵衛	茶湯初心抄の一部。挿絵３点。	茶道具之図（風炉釜炭道具、茶入、茶碗、棗、柄杓、天目、水指等）。莨盆を出した亭主の前で客２人が喫煙する図。亭主が台子で点茶し、客２人が茶を飲む場面。
25	倭漢節用無双嚢	天明４年	1784	中西敬房編、芦田鈍永書	京都の５書肆	茶湯初心抄の一部。	
26	万宝節用富貴蔵	享和２年	1802	下河辺拾水書・画	京都の８書肆	茶湯初心抄の一部。挿絵２点。	茶道具之図（風炉釜炭道具、茶入、茶碗、棗、柄杓、天目、水指等）と台子で点茶する場面。
27	倭節用集悉改大全	文政９年	1826	俟野通尚編	江戸、大坂、京都の９書肆	茶湯初心抄の一部。挿絵３点。	数寄屋入乃図（外待合で待つ客３人に亭主迎付の図、亭主と客３人の茶会の図、茶器之図。
28	大成無双節用集	嘉永２年	1849	鶴峯戊申世霊編	京都、江戸、大坂の７書肆	茶湯初心抄の一部。挿絵１点。	茶道具之図。
㉙	大日本永代節用無尽蔵	嘉永２年	1849	堀原甫編	江戸、京都の11書肆	茶湯初心抄の一部。挿絵３点。	茶之湯囲待合之図、茶道具之図、煎茶道具の図。
㉚	江戸大節用海内蔵	文久３年	1863	高井蘭山編		喫茶往来	

＊全体的に表紙、裏表紙、刊記部分は落丁・破損が多い。